

立ち読み版



一般社団法人日本金融人材育成協会 会長

もり

としひこ

森 俊彦 さん

1955年生まれ。東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。金沢支店長、金融高度化センター長などを歴任。退任後は、中小機構中小企業応援士、商工中金アドバイザー、さらやが銀行取締役、西尾信用金庫理事などを務める。政府委員としては、経済産業省「ローカルベンチマーク活用戦略会議」委員、金融庁「融資に関する検査・監督実務についての研究会」メンバー、内閣府「価値デザイン経営ワーキンググループ」委員などを歴任。著書に『地域金融の未来』(中央経済社)。

【写真】安岡 嘉

日本の中小企業を支える 金融人材育成のトップリーダー

【取材・文】原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役、株式会社スマートバリュー（東証一部上場）社外取締役、高知大学客員教授・経営協議会委員、名城大学非常勤講師、中小企業診断士、キャリアコンサルタント。早稲田大学卒業後、株式会社リクルートを経て起業し、人材ソーシャルビジネスを展開。著書「定年後の仕事は40代で決めなさい」(徳間書店)、『採用氷河期』(日本経済新聞出版社)、『インタビューの教科書』(同友舎) など多数。

HARA's
BEFORE

森さんの講演をオンラインで聴く機会があった。内容のシャープさに加え、情熱あふれる語り的魅力に魅了され、すぐに取材を申し入れた。

「中小企業の発展こそが経済や地域を活性化させる原動力であり、それを支援する仕組みが重要だ」という主張は、中小企業施策の王道を行く論説である。特に、金融の視点からのお話注目したい。



Umano! — Toshiniko Mori

「企業経営アドバイザー」とは 中小企業の“総合診療医”

原：中小企業家同友会のセミナーでの、「地域経済エコシステムの好循環ループ」というお話にとても共感しました。

森：新型コロナの影響で多くの中小企業が苦戦を強いられ、「キャッシュ・イズ・キング」であることが改めて認識されたと思っています。「地域経済のエコシステム」とは、金融機関と中小企業支援機関が連携し、融資と本業支援がセットになった伴走支援型融資を実行することで、中小企業の営業キャッシュフローが改善し、社員の給与上昇や資産形成などに持続的なプラスの

効果を生み出します。その結果、金融機関の営業基盤もしっかりするという「共通価値の創造」を生み出し続けることがカギなのです。

私は、日本全国の雇用の7割を支える中小企業こそ、エコシステムの屋台骨そのものだと思っています。大企業のほとんどは放っておいても自力で自走できますが、多くの中小企業は外部からの支援が必要で、事業性評価で洗い出された経営課題に対応し、事業を伸ばせるかどうかが大事です。中小企業向け融資とはエクイティそのもの(疑似資本)であり、貸した資金が伴走型支援によって生かされて企業価値向上が実現すれば、新たな設備資金や増加運転資金など資金需要を生み出すことにつながる。金融機関からは「資金需要はない」との声が聞かれますが、「資金需要は生み出すもの」です。

お金はいわば血液であり、日銀はそれを送り出す心臓です。身体全体に血液を循環させる血管が金融機関で、血管の先に中小企業があります。日銀は、身体の細胞の大半(企業数で99.7%)を占める中小企業にお金を届けることを目指していますが、お金を必要としている中小企業になかなか届かないことがあります。日銀にいたときから、いつもそれを歯がゆく思っていました。ですから中小企業診断士のように中立公平な立場で、中小企業と伴走しながら支援する人が必要なんです。日銀を退職した後は、自分もそうした役割を感じつつ活動しています。

原：日本金融人材育成協会の会長をはじめ、中小企業を支援する人材の育成にも注力されていますね。

森：一般社団法人日本金融人材育成協会は、金融